

映画『ショーシャンクの空に』に潜む謎と不思議

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-01-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 悟 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4869

映画『ショーシャンクの空に』に潜む謎と不思議

学芸学部 国際英語学科 高橋 悟

要旨：本稿は映画『ショーシャンクの空に』に潜む謎と不思議を取り上げて論考したものである。具体的な着眼点としては、①収容施設に関すること、②小道具に関すること、③身につける物に関すること、④主人公アンディの行動に関すること、⑤その他に関すること、の大きく五つに分類し、一つ一つの事物や事象を取り上げながらその背後にあるであろう意味や理由等を読み解いた。その結果、物語の中である程度合理的に解釈できるものと、物語外の事情、すなわち時間的制約を受けた制作者側の都合で端折らざるをえなかったと思われるものがあることが確認された。他方、作品鑑賞においては唯一の正しい方法はなく、脚本家兼監督のフランク・ダラボン自身も語っているように、視聴者は自分の人生と映像とを重ね合わせながら、自由に作品を鑑賞・解釈してもよいのであり、それこそがこの壮大な人間ドラマに込めた彼の切なる願いだったのではないかと思われる。

キーワード：ショーシャンクの空に、謎、不思議、フランク・ダラボン

はじめに

『ショーシャンクの空に』(英文原題：*The Shawshank Redemption*／脚本・監督：フランク・ダラボン)は1994年に公開された米国映画である。封切り当初はそれほど衆目を集めることはなく、制作費2800万ドルに対し国内の総興行収益は2800万ドルと、かろうじて赤字を免れた程度であった(ダラボン, 2004)。

しかし、その後はレンタルビデオの普及と相俟って徐々に国内外で人気を博し、さらに近年では動画視聴におけるサブスクリプションの定着にも後押しされ、今や至高の地位を固めるにいたっている。2022年11月末現在、米アマゾンの子会社のインターネット・ムービー・データベース(IMDb)社の「人気上位250映画(IMDb Top 250 Movies)」において、本作品は堂々の首位に君臨している。ちなみに第2位は『ゴッドファーザー』(9.2点)、第3位は『ダークナイト』(9.0点)、第4位は『ゴッドファーザー Part II』(9.0点)、第5位は『十二人の怒れる男』(9.0点)である。

本作品に流れる大きなテーマとしては、①希望(渡辺, 1995; 鷺巣, 1995; Sánchez-Escalonilla, 2005; Parse, 2007; 西内, 2009; Grady & Magistrale, 2016; Dawidziak, 2019; Nathan, 2019)、②友情(Darabont, 1996; Magistrale, 2003; 黒川, 2005; 金澤, 2017)、③宗教性(キリスト教的要素)(Kermode, 2003; 姜, 2007; Reinhartz, 2013; Dawidziak, 2019; 服部, 2019; 澤野, 2020)などが挙げられることが

多い。

その他、主人公の「段取り力」(齋藤, 2003)、「人間の魅力」(高橋, 2019a)、「レジリエンス(再起力)」(高橋, 2022)、「キャリア・チェンジ」(高橋, 2021a)、登場人物間の「同性愛」(國友, 2015)を主要テーマとして着目し分析した研究もある。

また本作品全体を取り上げ、他の脱獄映画や原作小説と比較した研究(高橋, 2019b; 高橋, 2021b)もあれば、英文原題に含まれる *redemption* の意味を多面的に掘り下げた研究(高橋, 2020)もある。

しかし、その一方で本作品の所々に見られる不思議で不可解な点について踏み込んだ研究は管見の限り見当たらない。

そこで本稿では、それらに焦点を当て、一つ一つの事物や事象を取り上げながらその背後にあるであろう意味や理由等を読み解いていくことにする。

この目的達成のため、本稿では解釈学のアプローチを採用する。解釈学とは「テキスト解釈の方法と理論を扱う学問」であり、「その場合のテキストとは、文字で表現された文書や文学作品だけでなく、現代では神話や夢、芸術作品など、解釈を要するあらゆる形式の言語作品までも含まれる」(久米, 2005)。したがってこのアプローチはセリフのある脚本に基づいて作られた映画に関しても十分に適用可能であると考えられる。

作品の基本情報とあらすじ

先に述べたとおり、本作品は1994年に公開されたアメリカ映画である。ステイーヴン・キングの中編小説を基にフランク・ダラボンが脚本化し監督した。

物語の舞台は米国東部メイン州で、時代設定は1940年代後半から1960年後半までである。主人公のアンディ・デュフレーションは30代の若さで大手銀行の副頭取に就いていたが、ある夜、妻とその愛人を銃殺した罪で終身刑を宣告され、ショーシャンク刑務所に投獄される。

しかしこれは全くの冤罪であり、かつ同刑務所は暴力や不正の巣窟であった。彼は理不尽な仕打ちに耐え忍びつつ、その過程において多くの利他的な行為を積み重ね、刑務官及び他の囚人たちから絶大な信頼を勝ち取る。そして投獄から19年後、独房の壁から密かに掘り続けたトンネルを通じて見事外界へと抜け出す。彼は収監中に刑務所長の汚職を隠すため、書類上のみ作っておいた架空の人物に現実社会で成り代わる。そして素知らぬ顔でその人物名義の預金を下ろし、メキシコへと渡りホテル経営に着手する。その後ほどなくして服役中に友情を築いた親友のレッドが仮釈放される。レッドは国境を越えてメキシコの浜辺を訪れ、アンディと感動の再会を果たすシーンでエンディングを迎える。

用語の定義

本作品の中には様々な謎や不思議が散りばめられているが、ともすれば見過ごしてしまいがちである。しかしそれらはこの壮大かつ豊穡な作品を織り成す要素でもあることから、本稿ではそれらを訪ね歩くように触れていきたい。

さて『広辞苑 第七版』（2018, 新村）によれば、「謎」とは「正体ははっきりしないこと。不思議・不可解なこと」となっている。また「不思議」とは「よく考えても原因・理由がわからない、また、解釈がつかないこと。怪しいこと」であり、「不可解」とは「(複雑または神秘すぎて)理解ができないさま。わけがわからないこと」とされている。つまり謎や不思議は人知を超えたものであると理解されるが、本稿ではこの作品に潜むそれらをまずは特定し、次にそれらを「わからない」ままにせず、できるかぎりその背景や理由等について次節で考えてみたい。

考察

作中の謎と不思議に関しては、その多くが主人公アンディに直接的・間接的に関わるものである。その一方でアンディ以外の登場人物に関する事柄もあることから、

これらについては本稿の最後に言及することにした。具体的な着眼点としては、①収容施設に関すること、②小道具に関すること、③身につける物に関すること、④アンディの行動に関すること、⑤その他に関すること、の大きく五つに分類し、さらに各分類の中の細かい事項について見ていくことにする。

1. 収容施設に関する謎と不思議

(1) トンネルの長さ(壁の厚さ)

アンディの独房は、四階建てのショーシャンク刑務所の二階の隅に位置する、いわば角部屋である。問題は彼が掘ったトンネルの長さ、すなわち独房の壁の厚さである。作中ではアンディを演じた身長190センチ以上のティム・ロビンスがその中を這い進むさまが映し出されているが、その長さ(厚さ)は五メートルほどはあるように見える。

しかし一歩引いて考えると、いかに堅固な刑務所の端にある独房とはいえ、五メートルもの分厚い壁を築く必要がはたしてあったのかという疑問が残る。したがって、この壁の厚さは19年にわたる彼の収監期間の長さを視覚的・象徴的に視聴者に示すための制作者側の工夫だった可能性がある。もし壁の厚さが数十センチであったならば、19年もの歳月を穴掘り作業にかけerる必要はなく、それゆえ最終局面においては異なった映像を見せていたことであろう。

他方、建物のトンネルを抜けた後、階下に現れる下水管の長さは500ヤード(約460メートル)もあり、懐中電灯を片手にその中を這い進む彼の姿は、トンネル掘りだけに留まらない脱獄という一大作業の困難さを表していると思えられる。

(2) 独房の移動・検査

作中では刑務所内で囚人が独房を移動させられるシーンは一切見当たらない。物語の途中で抜き打ち検査のシーンは描かれているものの、脱獄などを未然に防ぐための囚人間の個々の転房や刑務所全体の総転房は行われていない。さらに不思議なことはアンディが懲罰房に入れられていた間も、彼の独房が検査されなかったことである。もし検査されていれば、ポスターの裏を見られたり聖書のページをめくられたりした可能性は高いと思われるが、結局、彼が脱獄に成功したということは、そのような検査は行われなかったということになる。これは極めて奇妙なことであるが、ここで多少憶測を働かせれば、彼が長年にわたって築き上げてきた信頼関係が刑務官らに彼の独房を検査させる必要性を認識させ

なかった可能性がある。あるいは刑務所長から全幅の信頼を得ているアンディの会計・経理能力が刑務官らに畏怖の念を抱かせ、検査実施に踏み切らせなかった可能性があることも否定できない。

2. 小道具に関する謎と不思議

(1) ロックハンマー

ロックハンマーに関しては二つの謎と不思議がある。一つは、ロックハンマーの購入代金についてである。入所後ひと月ほど経った頃、アンディは初めて運動場でレッドに話しかけ、刑務所外からのロックハンマーの調達を依頼する。そして10ドルで取引することで交渉は速やかに成立する。しかし、この10ドル（おそらく実際はそれ以上の現金）をアンディがどのようにして刑務所内に持ち込んだのかは不明である。

現金をこっそり刑務所内に持ち込む方法については、原作小説の中で簡単な説明が付されている。それは入所時に体内に隠すという方法である。これは生物個体としての人間の身体に大きな負荷をかけることになるが、小説ではアンディはほぼ間違いなくこの方法で500ドルもの現金を持ち込んだとレッドは踏んでいる。しかしこの点は映画の中では全く描かれていない。筆者の推理では、おそらく制作側がさほど重要でないと判断し、この点を省いたのではないかと考えられる。

もう一つは、アンディの脱獄後の捜査でロックハンマーが下水管を抜けた先の小川で見つかったことである。この時に警察と刑務所側が見つけた物は、囚人服と石鹼とロックハンマーの三点だけであった。囚人服は汚泥まみれの下水管を這い進む際に体を守るために着用する必要があり、石鹼は外界に出た時に体を洗うために必要であったと考えられる。しかし、なぜロックハンマーも小川で見つかったのだろうか。

脱獄決行の夜、トンネルに入る直前にアンディは大切な帳簿類やチェスの駒をビニール袋に詰め込む。しかしそのシーンにはロックハンマーは映っていない。またトンネルと下水管を這い進む際に彼は懐中電灯を持っているが、ロックハンマーは持っていない。このことからおそらくロックハンマーはズボンのポケットに入れていたものと考えられる。では、いったいなぜ彼はロックハンマーを携行したのであろうか。この問いに対する答えやヒントを映画の中だけで見出すことは困難である。よってここからは原作小説の力を借りて推理したい。

脱獄発覚後、小説ではロックハンマーは下水管の穴のそばで見つかるのだが、映画では小川の中で見つかったとされている。実は小説ではその書き手であるレッ

ドは「アンディが下水管にもぐりこみ、(中略)四百五十メートル這い進んだところで、その突き当りに太い針金の網が張ってあったとしたら？ ハッハッ、とんだ大笑いだぜ」と語っている。この言葉は下水管の最後の出口に金網が取り付けられている可能性もあったことを示唆している。実際には映画でも小説でも、そのような状況設定ではなく、おかげでアンディは無事下水管をくぐり抜けて外界に出られたのだが、それはあくまでも結果論である。脱獄前の彼は下水管の構造を事細かくは把握できておらず、その不安ゆえに最終出口までロックハンマーを携行しなければならなかったのだと考えられる。下水管から小川に飛び込むことができ、そこでようやくロックハンマーを手放したのではないだろうか。

蛇足ながら、下水管を這い進んでいた時にずっと握りしめていた懐中電灯は、なぜか小川に飛び込む瞬間にはアンディの手の中にはなかった（少なくとも映像からは確認できない）。またその後の捜査でも懐中電灯が発見されたとの報告はない。よって懐中電灯は行方不明のままである。

(2) ポスター

アンディはリタ・ハイワースを皮切りにマリリン・モンロー、ラクエル・ウェルチと計三枚の女優のポスターを独房の壁上で貼り換えていった。ここでの謎はトンネルの長さが伸びるにつれて風通しが増し、ポスターを揺らしたり、音を立てたりすることはなかったのだろうかということである。例えば、独房内からの風でポスターが穴の中に押し込まれたり、逆に穴からの風でポスターが独房内でめくり上がったりしなかったのだろうかということである。もし看守たちがアンディの在室・不在にかかわらず、そのポスターの不自然な揺れや摩擦音に気づいていたら、アンディの脱獄計画はとうの昔に発覚し頓挫していたことであろう。

映像ではリタ・ハイワースのポスターは粘着テープではなく、何かの接着剤できれいに壁に貼られている。他の雑誌のページなどからの切り抜きや写真も美しく整然と貼られている。二枚目のマリリン・モンローのポスターに関しても上から下までびったりと壁に接着剤で貼られている。めくり上がっているのはむしろ彼女のスカートのほうである。三枚目のラクエル・ウェルチに関しても同様であり、脱獄後に所長たちが彼の独房に入り、怒りのやり場を失った所長がアンディが彫った石をポスターに投げつけ、穴が開いてもなおポスターが揺れることはなかった。石はポスターに受け止められることなく貫通し、トンネルの中へと転がっていったのである。

彼は毎晩ポスターの下部を壁から剥がしては穴掘り作業を続けていたはずであるが、穴の幅を鑑みるに穴の中で自分の体をUターンさせることは不可能であった。よって作業終了後、独房に戻ってから再度丁寧にポスターの下部を壁に貼っていたと考えられる。他方、脱獄に際し最後に穴に入り込んだ時はポスターの下部は壁から剥がれたままだったはずである。しかし、なぜ所長たちは彼の独房に入った時、ポスターの揺れにすぐに気づかなかったのであろうか。これは難問であるが、以下に筆者なりの推理を述べたい。

小説では監房は一人部屋ではなく二人部屋であり、アンディと八カ月間同房で過ごした囚人がどこからともなく入ってくる「すきま風」の寒さについて何度も言及している。しかし映画では彼の部屋は独房であり、「すきま風」に関する要素は完全に排除されている。したがって微動だにしないポスターはアンディの脱獄への不退転の決意と不動心を象徴しており、それゆえ徹頭徹尾揺れてはいけなかったのではないだろうか。

以上は筆者が制作者側を擁護しようとして考えた解釈である。しかし、このアンディが最後に穴にもぐり込むシーンに関しては、ダラボン自身(2004)が撮影時の制約について次のように正直に語っている。「多くの人がどうやってポスターを戻すのか聞かすが、映画だから黙って受け入れてくれ。そういう個所(筆者註:正しくは「箇所」)があるのはその時、時間がなかったんだ」と。

(3) 下水管を砕く大きな石

脱獄の途中、アンディは監房棟のトンネルを抜け、雨樋(縦樋)らしきものをつたって階下に敷設された下水管まで降りる。彼は下水管に穴を開けるため、大きな石をあらかじめその場所に用意しておいたと考えられる。なぜなら、もし事前にそこに石を置いていなければ、その時にその場所で都合の良い石が偶然見つかるはずなどないからである。その石は不自然なほど唐突に彼に握り締められて降り下ろされるが、それは細心かつ周到な準備を彼が前もってしていたからにはかならない。そのプロセスは映像にはないが、そのように断定せざるをえないのである。

では次に、なぜ彼は事前にではなく、あえて実行当日に下水管を割ったのであろうか。その理由としては、下水管を割る時に発生する音をかき消すためには、雷鳴が轟く必要があり、その条件が脱獄当夜までに整わなかったからであると推測される。逆に言えば、彼は嵐の夜が来る日を辛抱強く待ち、そしてようやくそれが来た日に脱獄を執行したのだと考えられる。彼は下水管を抜けて

小川にさえ出れば、あとは雷雨と川の水が匂いも足跡もすべてを消し去ってくれると深慮していた可能性もある。

(4) 黒曜石

「黒曜石(black volcanic glass)」という言葉は物語の最後のほうで一度だけ出てくる。それは再審請求の件で刑務所長を激怒させ、計二カ月の懲罰房入りを食らったアンディがようやく解放され、レッドと中庭で言葉を交わすシーンの中である。アンディはレッドに対し、仮釈放されたらバクストンの牧草地へ行き、大きな榎の木へと続く石塀の根元にある黒曜石を掘るよう約束させる。そしてその黒曜石は「メイン州の牧草地とは縁もゆかりもない石(a rock that has no earthly business in a Maine hayfield)」(アルク英語企画開発部編,1998)であると告げる。

仮釈放後、レッドは約束どおりバクストンを訪れ、黒曜石を見つけるが、アンディがどのようにしてその石をそこに置いたのかは描かれていない。その石の下にはレッドに宛てた手紙と紙幣を入れた金属製の箱が隠されていたのだが、それはアンディが脱獄後速やかに置いたものである。黒曜石がもともとそこにあることを彼が知っていたのか、それとも他の場所から持ち運ぶつもりでいたのかは不明である。もし前者であれば、彼は投獄前からその場所にその見慣れない石があることを知っており、19年を経た今でもそこにあると確信していたことになる。またもし後者であれば、別の場所から持ち運ぶことを計画していたことになる。

ちなみに小説では、この石はかつて彼が銀行で働いていた時に机上で文鎮として使っていたものであり、服役中に親友のジムがその場所に置いてくれたということになっている。

(5) 聖書のくり抜き

入獄当初にレッドからロックハンマーを調達してもらったアンディは抜き打ち検査に備えてそれを聖書の中に隠していた。このことは刑務所長が自害する直前に判明する。脱獄したアンディからの情報提供により、刑務所内の不正と殺人を新聞社にすっぱ抜かれた所長は警察の手が自分に伸びていることを悟る。彼はパトカーのサイレンの音を聞き、自室の隠し金庫の中を確認するのだが、そこには帳簿ではなく、アンディの聖書が入っていた。中を開くと表紙の裏に「所長、確かに救いはこの中に」というアンディのメッセージが書かれており、さらにページをめくるとロックハンマーの形に合わせて切り

抜かれたスペースが現れる。所長はショックのあまり聖書を落としてしまうのだが、ここで注目したいのは次の二点である。

一点目は、この切り抜きの輪郭があまりにもシャープであることである。おそらく鋭利なナイフかカッターで切られたものと思われるが、その輪郭は直線ではなく、ロックハンマーの丸みやカーブに合わせて美しすぎるほどぴったりと切り取られているのである。二点目は、そのスペースが驚くほど清潔だということである。すなわち長年ロックハンマーを隠していた場所であるにもかかわらず、周辺に泥や砂塵が付着しておらず、紙の色も真っ白のままだということである。これは極めて不思議であり不可解なことである。

あえて理由を考えるならば、几帳面で器用なアンディが丁寧にページを切り抜き、そして毎晩の穴掘り作業の後、ロックハンマーの汚れをきれいに拭き取ってからそのスペースに戻っていたということである。あるいは穴掘りを始めてからは聖書の中に隠すのは止め、穴の中に隠していたのかもしれない。そうすれば穴に入っすぐに作業に取りかかることができたと考えられる。

(6) 切手と封筒

脱獄後、アンディは地元新聞社宛での封筒を手を持って銀行を訪問している。その封筒には二種類の切手がそれぞれ四枚と三枚、計七枚貼ってあったが、彼はそれを銀行からの発送郵便物の中に加えるよう出納係に依頼する。そしてその出納係は快く引き受けるのだが、この場面は考えてみると不思議なところがある。

銀行訪問時に七枚の切手はすでに封筒に貼られている。そのことはアンディがそれ以前に郵便局を訪れ、切手を購入していたことを意味する。また封筒に関しても刑務所から持ち出さない限り、その日の朝、郵便局か文具店で買っていたことになる。なぜ彼は郵便局で切手を買った後、すぐにそこから発送しなかったのだろうか。これはまったくの謎である。

あえて無理な推理をすれば、二点ほど可能性がある。一点目はこの日、彼のスケジュールはぎっしりと詰まっており、郵便局から発送する時間さえも惜しまれたということである。他方、ここまで来れば主（神）の裁きが刑務所長と刑務主任に下ることは必至であると確信し、郵便局では切手だけを購入し、銀行では長期大口顧客として悠々と発送を依頼した可能性がある。そしてこの日は12行近い銀行で預金を下ろすことに専念したのかもしれない。その移動の途中でレッド宛ての手紙と現金を入れるための金属製の箱もどこかの店で買ったのであ

ろう。一夜明けて翌朝、バクストンに行き（利用した交通手段は不明だが、手元に豊富なお金があったので何とでもなったのであろう）、その箱を先の黒曜石の下に隠したのではないかと考えられる。このように脱獄後の彼は思いのほか忙しかったのである。

二点目は、彼は収監中に切手の調達を済ませており、郵便局には寄っていない可能性もあるということである。何事にも抜かりのない彼のことであり、脱獄前に十分な枚数の切手を入手していた可能性があることも否定できない。

3. 身につける物に関する謎と不思議

(1) 衣服と靴

ここでは脱獄後の銀行訪問時にアンディが身につけていたワイシャツ、背広、ズボン、靴について取り上げたい。決行当夜、アンディが所長室での仕事を終えて自分の独房へと戻るシーンはレッドのナレーションに合わせて開示されるが、この一連の流れを見る限り、これら四点はすべてアンディが所長室からくすねた物であると理解することが妥当であろう。用意周到な彼は外界に出た後に身につけるべき物を手に入れ、すべてビニール袋の中に詰め込み、自分の脚に縛り付けてトンネルにもぐり込む。そして気の遠くなるほど長い下水管をくぐり抜けて脱獄を遂げる。

しかし、問題はこれらの身につける物のサイズである。映像ではアンディと所長の身長差は10～15センチほどあるように見えるが、もしそうであれば、ワイシャツの袖丈や背広の着丈、ズボンの股下は所長の寸法では短すぎることになる。また靴のサイズもアンディには小さすぎることになる。

しかし、アンディの銀行訪問時の映像を見る限り、これらはすべて完全に彼の体にフィットしている。ネクタイは別にしても、一般に他人の身につける物が自分にフィットすることは稀であり、ましてやこの両者の体格差を考えるといかにも不自然であり説明がつかない。

アンディが寸法を直したり異なるサイズのを別途調達したりするシーンは一切描かれていないことから、制作者側がそこまで気が回らなかったのではないかと推測される。あるいは気が回っていたとしても、スピーディにストーリーを展開するうえでそこまで細かいプロセスを映す必要はないと判断した可能性もある。

(2) 脱獄後の着替え場所

下水管から小川に出た後、雷雨に打たれながら両手を嬉々として広げるアンディの姿を覚えている人は多い

であろう。日本で販売されている DVD の中にはこのシーンをジャケットに用いているものもある。

さて、アンディはこのシーンの後、こざっぱりしたスーツ姿で銀行に足を踏み入れる。しかし、彼がその前にどこで着替えたのかは明かされていない。筆者の推理では、アンディは雨をシャワー替わりにして体に染みついた汚れを石鹸で洗い流し（それゆえ石鹸は小川で発見された）、深夜から未明にかけての暗がりの中でどこかの場所で雨宿りしながらスーツに着替えたのだと考えられる。その後、雨が上がったことは幸運であったが、彼は雨が上がる時間さえも前夜に把握していたのかもしれない。

そして着替えた後、いったん宿に行き、シャワーを浴びて仮眠し、きれいに髪型を整えてから銀行を回ったのだと推理される。なぜなら一行目のメイン・ナショナル銀行を訪れた時、彼はチェスの駒の入った箱を持っていなかったからである。すなわち彼はメキシコに持って行く物をどこかのホテルに置き、身分証明書や地元新聞社宛てに発送する封筒など最低限必要なものだけを持って出かけたのだと考えられる。

4. アンディの行動に関する謎と不思議

(1) 刑務所で迎えた最初の朝

入獄して一夜明けた最初の朝、独房のドアが一斉に開き、アンディは勝手がわからないながら隊列の後ろについて食堂へ行く。ここで彼は自分のトレイの中に生きたウジ虫が入っていることを知ってぞっとする。このシーンを見て背筋が寒くなる思いをした視聴者も多いことであろう。近くにいたブルックスが目ざとくそれを見つけ、保護したカラスの餌用にアンディに乞うのだが、この時レッドを含む他の囚人たちは平然としていた。つまり彼らはウジ虫が混入した不衛生な配給食について何の驚きも抵抗も感じていなかったのである。しかし、その後はこのような問題のある食事に関するシーンが再度映し出されることはなく、むしろ食堂に集い合う彼らはいつも楽しそうにしている。

なぜ不衛生な食事の場面が出てきたのは一度だけだったのだろうか。それはおそらくアンディがそのような食事に慣れたからなのであろう。刑務所の食事の質が短期・中期的に改善されることは考えにくいから、アンディのほうが素早く順応して耐性を身につけ、物語の中であえて映像として取り上げる必要がなくなったと考えられる以外には合理的な解釈はむずかしい。

この食堂のシーンでは、アンディは自分と共に入所した囚人の一人が看守に殴られて死亡したことも知る。そ

してその話をしていた連中に死んだ囚人の名を尋ねる。おそらく彼は「同期入所」の囚人に幾ばくかの同情や憐れみを覚えたのであろう。なにぶんにも最初の朝のことであり、自分自身が動揺の渦中にあってもなお、共感力の高い彼は尊い命を落とした者に対して関心を抱いたのだと考えられる。

(2) 刑務主任へかけた言葉

1949年の春、ナンバープレート工場の屋根で仲間とコールタール塗りをしていたアンディは、刑務主任が遺産相続の件で愚痴をこぼしているのをたまたま耳にする。そしてその主任に音も立てずに近寄り、「奥さんを信じていますか？」という唐突な言葉をかける。この不穏とも受け止められかねないアンディの挙動で刑務主任と周りの刑務官たちに緊張が走るが、彼は続けて「裏切られる心配とかは？」と不躰な質問を続ける。これに対し刑務主任は激怒し、彼の首根っこをつかまえて屋根の端まで連れていく。アンディは突き落とされる恐怖を感じながらも、そこでようやく相続税免除の手続きについて口早に説明し、刑務主任の理解と了承を得る。

作品全編を通じて描かれているアンディの沈着冷静な性格を踏まえると、この一連の言動はおよそ彼らしくないものである。いったいなぜ彼はそのような行動に出たのであろうか。

筆者の推理では、この時期のアンディは入所二年を経たところであり、ボグズら一味に日常的に暴行を加えられる悲惨な生活を送っていた。その直前のシーンでレッドがアンディのことを「悪夢の二年間だったろう」とナレーションを入れているように、アンディは心身ともに衰弱しており、その不安定な状態が彼を直截な行動に走らせたのではないかと考えられる。その一方で、結局この一件を大きな境目として彼は仲間からも刑務官からも信頼され、時に慕われる存在へと変わっていくのである。

(3) 再審請求

1965年にトミーが入所し、かつて別の刑務所で同房だったエルモ・ブラッチという囚人が犯した殺人についてレッドとアンディに話す。驚くべきことにその被害者はアンディの妻と間男に相違なく、アンディもまたそのとぼっちりを受けた被害者であった。

アンディはすぐに刑務所長と面会し、再審請求について直談判する。しかし所長はその要望を聞き入れず、そのあまりの愚鈍さに苛立ったアンディは暴言を吐いたとして、即座に懲罰房入りを命じられる。この映画の中で

アンディが最も感情を高ぶらせ、大声で何度も叫んだ場面である。

いったいなぜ彼はそこまで激しい行動に出たのだろうか。考えてみると、彼はこの時点で入所後18年を経ており、脱獄用のトンネルはほとんど掘り終えていたはずである。もし再審請求が認められれば、刑務所外に出廷することもあり、そうなれば不在中に独房を検査される可能性も出てくる。そのことはせつかく長い歳月をかけて掘り続けたトンネルが見つかってしてしまう恐れが高まることを意味する。では、なぜ彼はそのようなリスクを冒してまでも再審請求を切望したのだろうか。

これは難問であるが、おそらく彼にはアンディ・デュフレーションというひとりの人間の潔白を証明したいという自尊心やプライドがあったのではないだろうか。あるいは無罪判決を受ければ再び銀行関連の仕事に就くことができる考えたのかもしれない。他方、もし再審請求を経なければ、仮に脱獄が成功したとしても、彼の犯罪歴は永久に歴史に刻まれることになる。彼はそれを嫌い、再審請求を望んだのであろう。しかし、貴重な証言者となるはずのトミーはその後、所長の指示で闇夜に銃殺され、アンディは一縷の望みさえも絶たれてしまう。

5. その他の謎と不思議

(1) 新聞記事掲載と隠し金庫解錠のタイミング

映像では地元新聞社が「ショーシャンクで不正と殺人 (Corruption, Murder at Shawshank)」という大見出しと記事を新聞一面に載せたのはアンディから封筒が届いた日の翌朝のように見える。この辺りの素早い話の展開からはそのように受け止めるのが自然であろう。しかし、その大見出しの下にはやや小さな文字で「地方検事は帳簿を入手し、起訴する見通し (D.A. Has Ledger - Indictments Expected)」という見出しも付されている。すなわち新聞社はアンディから受領した不正帳簿等一式をもとにいきなり事件をすっぱ抜いたのではなく、それらを証拠書類として司法に提出し、その後十分に裏を取ったうえで記事として掲載したのだと考えられる。

したがって、仮にその一連の確認作業が極めて速やかになされたとしても刑務所内の悪事が暴露されるのは新聞社に封筒が到着した日の翌日以降になる。あるいはもしその作業に丸一日以上かかるものなら新聞の一面に載るのは封筒到着日の翌々日以降、すなわち脱獄発覚後三日以上を経てからのことになる。そもそもアンディは普通に切手を貼って封筒発送を銀行に依頼している。よって刑務所長が自室の隠し金庫の扉を開けたのは脱獄発覚日の翌朝ではなく、二日ないし三日以上たってから

のことになる。

これはタイミングとしてはいかにも不自然である。なぜなら所長が何よりも恐れていたのはアンディの脱獄によって自身の不正が世間に明るみに出てしまうことであり、脱獄発覚後に所長が真っ先にすべきことは帳簿の所在を確認することだったからである。しかし以上の推測に従えば、所長が隠し金庫を解錠して黒い本を開き、衝撃に打ちひしがれたのは早くても脱獄発覚から二日ないし三日以上もたってからのことになる。

制作者側がここまで細かく時間の流れを意識・掌握していたかどうかは定かではないが、おそらく作品後半に迅速かつなるべくわかりやすく話を進めていくうえで、軽微な事柄はあえて削ぎ落としたのでないかと考えられる。

(2) トミー

トミーは1965年に家宅侵入罪で二年の刑で入所してきた若者である。彼に関する不思議なシーンは少なくとも二つある。一つ目はやたらと明るい入所シーンである。映像では彼が他の囚人と共に護送車に乗せられているところが描かれているが、車両到着時に荒くれの先住囚人たちが大騒ぎで出迎える様子はなく、アンディたちが所長や刑務主任から受けた冷酷かつ手荒い「洗礼」についても同様にない。バックミュージックとして流れる力強いロックンロールのせい、そこには暗さや翳りはいささかも感じられない。アンディの入獄時とは極めて対照的であり不可解であるが、もしかしたらこの時の入所者は軽犯罪で収監される短期受刑者ばかりだったのかもしれない。

二つ目の不思議は、トミーがレッドと木工場にいる時にコカ・コーラを飲む場面である。高卒資格取得試験の終了後、自らの不出来に腹を立てたトミーはアンディの目の前ででかした失礼な振る舞いを悔いる。これに対しレッドは「(アンディは) お前を誇りに思ってるさ」と言ってトミーを慰める。レッドはアンディの経歴や犯した罪についてトミーに教えるが、彼らは言葉を交わしながら比較的ゆったりとした動作でコカ・コーラを飲む。

この木工場ではトミーの後方に刑務官一人と床を掃除する囚人一人が映っている。それにもかかわらずトミーとレッドの二人だけがひとつ間違えば凶器にもなりうるコーラのガラス瓶を片手に直飲みしているのである。先に述べたナンバープレート工場の屋上でビールを飲むシーンとこのシーン以外には瓶に入った飲み物を飲むシーンは出てこない。前者はアンディの免税手続き代行に対

するご褒美としてのビールの提供であったが、後者においてはなぜ彼らが木工場でゆったりとコーラを飲める状況にあるのかは不明である。

ここでもやや無理な推理をすれば、この場面で映っている人物がトミー、レッド、他の囚人、及び刑務官の四人だけであることから、週末か祝日前の夕刻にほぼ労役を終え、独房に引き上げる直前の短くもリラックスしたひと時でのやりとりだったのかもしれない。

(3) レッド

レッドにまつわる謎と不思議は三つある。一つ目は彼が携行する茶色いかばん（手提げの小型スーツケース）が異様に軽いことである。仮釈放時、刑務官たちに見送られ刑務所の門から出る際に彼が持つかばんはその軽さのあまりブラブラしており、中に何も入っていないかのようである。筆者は米国の刑務所事情、特に入所時と出所時のことについては何も知らないが、40年前に入所した時の所持品や労役の対価として現金などがかばんの中に入っているもよさそうな気がする。しかしこの時のかばんは全くのカラのように見える。次にかばんが映るシーンは、バクストンを訪れた彼がアンディに会いにメキシコに行くことを決心し、定宿を去る時である。外の世界で一定期間を過ごし、これから数日かけて陸路で移動することになるにもかかわらず、最低限必要な衣服さえ入っていないかのようである。その証拠にベッドの上に置いたかばんを両手で押さえつけて閉じるにもかかわらず、その直後に片手でラクラクと持ち上げるのである。そして最後にかばんが映るのは彼がメキシコの白浜を歩くシーンである。彼の視界にはすでにアンディとボートが入っていたが、長旅を経ても依然としてかばんは軽く、彼が一步一步アンディに近づくたびに上下左右に揺れ動くのである。

なお、仮釈放といえば、レッドよりも先にブルックスが出所しており、刑務所からホテルまでかばんを携えて歩くシーンが描かれている。しかし、ブルックスのかばんはレッドのそれよりも上下動が少なく、いくぶん重量があるように見える。この所見は筆者の主観の域を出ないが、もしかしたらブルックスのかばんの重さは出所後も希望を見出せなかった彼の前途を、レッドのかばんの軽さは出所後に希望を見出すことができた彼の前途を象徴していたのかもしれない。

二つ目はテキサスへ向かうバスに乗っている時のレッドの体勢についてである。自分の座席に面した左側の窓を全開にし、「ワクワクして落ち着かない。自由な人間の喜びだ。この長旅の結末はまだわからない」と語り、

期待と不安の入り混じった表情で車窓から外を眺める。このとき彼は左の肩と肘を十センチほど窓の外に突き出している。しかしその直後にバスが下り勾配の道を走るところを後方から映したシーンでは、彼の肩も肘も窓の外には出ておらず、完全に内側に引っ込んでいる。これは映像上の流れとしては不自然である。

あえて善意に解釈すれば、彼は場面が切り替わる瞬間に本当に腕を引っ込めたのだろう。それゆえにその動きがスクリーンに映らなかったのだと考えられる。もう一つの可能性としては、映像では数秒間しかなかったものの、彼が肩と肘を突き出しているシーンとバスが下り勾配の道を走るシーンとの間には数十秒以上の間隔があり、その間に彼が体勢を変えたのだとも考えられる。ただし、これらの推測には無理があることから、おそらくは制作者側がそこまで配慮しなかったことに起因するものと思われる。

三つ目は彼がどのようにして国境を越えたのかということである。彼はパスポートを持っていたのだろうか。アンディの場合はランドール・スティーンズ名義で運転免許証などを脱獄前に所持していた。映像には出てこないが、如才ない彼はパスポートも作っていたのかもしれない。しかしレッドの場合はどうであろうか。おそらく仮釈放中の身ではパスポートを作ることはできないであろう。したがって、彼はパスポートなしに密入国したと推測される。あるいは密入国にはちがいないが、1960年代の国境管理は今ほど厳しくなかったであろう。特に当時の超先進国アメリカから途上国メキシコへの入国はとりわけ容易であった（逆にメキシコからアメリカへの入国は非常に厳しかった）のではないかと考えられる。

むすび

前節までに筆者が本作品を繰り返し鑑賞する中で疑問に思ったこと、不思議に感じたことにつき、その背後にあるであろう意味や理由等を読み解くことを試みた。その結果、物語の中である程度合理的に解釈できるものと、物語外の事情、すなわち時間的制約を受けた制作者側の都合で端折らざるをえなかったものがあることが確認された。

以上、努めて客観的に解釈・記述したつもりではあるが、いずれも筆者個人の主観に基づくものである。そのせいもあり、壮大な本映画の重箱の隅をつついては過ぎないとの印象を残した可能性も否定できない。作中においても、マイクから流れる女性デュエットの美しい歌声に魅了されながらも、レッドがその歌詞の意味につ

いては「言わない方がいいことだってある (Some things are best left unsaid.)」とナレーションを入れているように、個々の謎と不思議については詮索するべきではないとの考え方もあるであろう。

しかし各シーンや小道具などに関しては、ダラボン自身 (2004) も「作り手の意図を超えて観客が感じることもある。だから何を読み取ったか語るのは観客かも。見る人にとっては特別な意味がある場合もある。(中略) 観客がそこに深い意味を見つけようとするのは面白い。“そうだよ 意味がある”と言いたくなる」と語っている。この言葉は、視聴者は自分の人生と映像とを重ね合わせながら、自由に作品を鑑賞・解釈してもよいのだということを保障してくれていると受け止められる。そしてそれこそがこの豊穡な人間ドラマに込めた彼の切なる願いだったのではないと思われる。

参考文献

アルク英語企画開発部編 (1998) 『映画で覚える英会話 アルク・シネマ・シナリオシリーズ ショーシャンクの空』, アルク.

Darabont, F. (1996). *The Shawshank Redemption: The Shooting Script*. New York: Newmarket Press.

ダラボン, フランク (2004) 「音声特典: 監督フランク・ダラボンによる音声解説」, 『ショーシャンクの空に』(*The Shawshank Redemption*). Dir. Frank Darabont. Castle Rock Entertainment, 1994. Supplementary Material, 2004. Warner Home Video, 2005. DVD.

Dawidziak, M. (2019). *The Shawshank Redemption Revealed: How One Story Keeps Hope Alive*. Guilford: Lyons Press.

Grady, M. & Magistrale, T. (2016). *The Shawshank Experience: Tracking the History of the World's Favorite Movie*. New York: Palgrave Macmillan.

服部弘一郎 (2019) 『銀幕の中のキリスト教』, キリスト教新聞社.

Internet Movie Database (IMDb). *IMDb Top 250 Movies*, <https://www.imdb.com/chart/top?ref_=nv_mv_250> (2022年11月30日閲覧)

姜尚中 (2007) 「姜尚中 映画を語る (第21回)」, 『第三文明』, 第三文明社.

金澤誠 (2017) 「ショーシャンクの空に」, 前野裕一編, 『午前十時の映画祭8 プログラム』, キネマ旬報社.

Kermode, M. (2003). *The Shawshank Redemption*.

London: British Film Institute.

久米博 (2005) 「解釈学」, 下中直人編, 『世界大百科事典』改訂版, 第4巻, 平凡社.

國友万裕 (2015) 「同性愛映画としての『ショーシャンクの空に』」, 『映画英語教育研究』, 20, 137-147.

黒川裕一 (2005) 『見ずには死ねない! 名映画300選 (外国編)』, 中経出版.

Magistrale, T. (2003). *Hollywood's Stephen King*. New York: Palgrave Macmillan.

Nathan, I. (2019). *Stephen King at the Movies: A Complete History of the Film and Television Adaptations from the Master of the Horror*. London: Palazzo Editions.

西内誠 (2009) 「"Get busy living or get busy dying": *The Shawshank Redemption* (1994)」, 『OLIVA』, 16, 97-155.

Parse, R. P. (2007). Hope in "Rita Hayworth and Shawshank Redemption": A Human Becoming Hermeneutic Study, *Nursing Science Quarterly*, 20 (2), 148-154.

Reinhartz, A. (2013). *Bible and Cinema: An Introduction*. Abingdon: Routledge.

Sánchez-Escalonilla, A. (2005). The Hero as a Visitor in Hell: The Descent into Death in Film Structure, *Journal of Popular Film and Television*, 32 (4), 149-156.

新村出編 (2018) 『広辞苑 第七版』, 岩波書店.

齋藤孝 (2003) 『段取り力: 「うまくいく人」はここがちがう』, 筑摩書房.

澤野純一 (2020) 「ある映画における宗教の多元性について: 『ショーシャンクの空に』に埋め込まれたキリスト教」, 『福祉と人間科学』, 30, 73-83.

高橋悟 (2019a) 「映画『ショーシャンクの空に』の主人公の魅力を解き明かす: Katzが唱えた3つの基本スキルの視点から」, 『英語と文化: 大阪樟蔭女子大学樟蔭英語学会誌』, 9, 15-24.

高橋悟 (2019b) 「『ショーシャンクの空に』の脱獄映画としての独創性」, 『大阪樟蔭女子大学研究紀要』, 9, 13-24.

高橋悟 (2020) 「映画『ショーシャンクの空に』の英文原題を考える: *redemption* が意味するものとは」, 『英語と文化: 大阪樟蔭女子大学樟蔭英語学会誌』, 10, 7-22.

高橋悟 (2021a) 「キャリア・チェンジ・ストーリーとしての映画『ショーシャンクの空に』」, 『大阪樟蔭

女子大学研究紀要』, 11, 1-12.
高橋悟 (2021b) 「原作小説と映画の未だ語られざる五大相違点：『刑務所のリタ・ヘイワース』と『ショーシャンクの空に』」, 『英語と文化：大阪樟蔭女子大学樟蔭英語学会誌』, 11, 35-47.
高橋悟 (2022) 「映画『ショーシャンクの空に』の主人公にみるレジリエンス：漫画『鬼滅の刃』の主人公との対比を通じて」, 『大阪樟蔭女子大学研究紀要』, 12, 11-22.
鷺巣義明 (1995) 「スティーヴン・キング映画の系譜」, 『キネマ旬報』, 1162, 26-29.

渡辺祥子 (1995) 「ティム・ロビンズってほんとにいい役者」, 『キネマ旬報』, 1162, 24-25.

映画作品

『ショーシャンクの空に』(*The Shawshank Redemption*).
Dir. Frank Darabont. Castle Rock Entertainment, 1994.
Supplementary Material, 2004. Warner Home Video, 2005. DVD.

(本稿の中で引用したセリフは、特に記載のない限り、本 DVD の日本語字幕を採用した)

The Wonders and Mysteries Latent in *The Shawshank Redemption*

Faculty of Liberal Arts, Department of English as an International Language
Satoru TAKAHASHI

Abstract

This paper aims to identify and demystify a series of 16 wonders and mysteries latent in *The Shawshank Redemption*. To this end, the author classified them into the following five categories, namely, 1) buildings and facilities, 2) props and small items, 3) clothing and shoes, 4) words and behavior of the protagonist, and 5) other issues. Then the author dissected those enigmatic points and found out the reasons or meanings lying behind them. As a result, some turned out to be logically expounded to a certain extent, whereas others did not. Still, remaining inexplicable or unfathomable does not undermine the essence of this masterpiece in the least. In fact, as Frank Darabont, the screenwriter and director of the film, says viewers are freely able to interpret the movie while overlapping each scene with their own lives. Such an open-minded and subjective way of enjoying this colossal human drama would be what Darabont expects us to adopt.

Keywords: *The Shawshank Redemption*, wonders, mysteries, Frank Darabont